最長不倒距離＊スキー場殺人事件＊都筑道夫

都筑道夫

最長不倒距離

スキー場殺人事件

徳間書店

昭和四十八年二月十五日　初刷
昭和四十八年三月五日　二刷
発行者　徳間康快
発行所　徳間書店
東京都港区新橋四ノ一〇　郵便番号一〇五
電話四三三・六二三一　振替東京四四三九二
都筑道夫
最長不倒距離　スキー場殺人事件
印刷所㈱清水印刷所／製本所　明泉堂
Michio Tsuzuki © 1973　検印廃止
落丁・乱丁はおとりかえいたします
六九〇円

0093-128547-5229

「幽霊屋敷をしらべにいく」というと、笑うひとが実に多い。そういうひとたちは、だれかが「空を飛ぶ機械をつくりたい」といったとき、嘲笑った連中の子孫だろう、と私は思うことにしている。

ジェイコブ・バーディン『ゴースト・ハンターの思い出』

これを仮に、「孤立した山荘」テーマと呼ぶことにしよう。もちろん、吹雪に閉じこめられた山荘だけでなく、暴風雨で交通が途絶した村も、豪雪に立往生した列車も、高浪で舟が出せない小島の別荘も、このテーマにふくまれる。警察科学の発達が、論理による謎とき小説には、邪魔になりかねない現在、このテーマは見なおされていい。

ギルバート・C・ケイス『技巧から見た推理小説の発展』

装釘　山藤章二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

口絵がわりの抜萃シーン　1

雪の斜面に、樅（もみ）の木が一本、クリスマスの絵葉書みたいに立っている。あざやかなシュプールが、その木にむかって、直進していた。幹の手前で、シュプールは、ふた筋にわかれている。ふた筋のスキーのあとは、両足を大きくひろげて、また閉じたように、樅の木のむこうで、ふたたび一緒になっていた。幹に激突する直前に、スキーヤーが気体に化したか、とてつもなく両足がのびて、樅の木をまたいでいったみたいだった。グロテスク漫画で知られるアメリカのチャールズ・アダムズに、そっくりな作品があったのを、片岡直次郎はおぼえている。それがいま、現実の場景として、目の前にあるのだった。津山めぐみは、カナリア色のスキーパンツの腰をひねって、いやに用心ぶかく、問題のシュプールに近づきながら、

「これ、ほんとに滑ったあとよ。スキーだけ滑らしたり、板きれでこすったりしたんじゃ、こんな跡はつかないもの。ちゃんと人間の重みが、かかってるわ」

「たしかにね。まわりの雪には、足跡ひとつない」

直次郎はうなずいて、ゆっくり滑りだした。アダムズの漫画では、シュプールのさきには普通の人間としか見えないスキーヤーが、ごく普通に両足にスキーをはいて、きわめて普通にすべっていた。この現実の場景では、スキーヤーはいない。シュプールは大きく弧をえがいて、すでに荒されている雪面へ、消えこんでいた。直次郎がスキーをとめて、樅の木をふりかえると、わきへ追いついためぐみが、急に寒気をおぼえたような声で、

「ねえ、いったいどういうことなのよ、これ？」

口絵がわりの抜萃シーン　2

死体は裸だった。温泉に入っているのだから、裸であっても不思議はない。不思議なのは、頭だけ見ると男で、からだを見ると女だったことだ。バリカンで青道心にかりあげたのが、やっと少しのびかけました、といった頭をしている。顔は男にしてはやさしい目鼻立ちだが、眉も自然のままで、化粧なんぞはしていないように見えた。くちびるだけは鮮かで、紅を塗っているみたいに、見えないこともない。そんなぐあいに、だんだん女らしくなっていって、湯のなかに沈んでいる胸には、これはもう、はっきり乳房が盛りあがっている。そう大きくはないけれども、下半分の見事な球状のふくらみが、乳暈（にゅうん）の小さな乳首を突きあげていた。

死体は両手を左右の岩にかけて、浴槽の浅いところに、腰をおろしている。あまり透明でない

湯に、腰のひろがりは仄白く滲(にじ)んでいるけれど、投げだした両足のつけ根の、薄墨をかるく掃いたような翳(かげ)りが、男のものでないことは見てとれた。照明の薄暗さに目をむいて、湯のおもてにかがみこんでいた岩下五郎が、傍若無人な声をあげて、

「頭をまるめているだけじゃなくって、この女、下の毛まで剃ってるようだぜ。薄いたちなのかと思ったら、こりゃあ、のびかけたところらしいや」

「尼さんかしら」

恐るおそるめぐみがいうと、五郎は大げさに首をかしげて、

「尼さんなら頭は剃っても、腋の下や下っ腹は剃らないだろう。パンストやジーパンも、はかないと思うよ」

脱衣場の籠は、ひとつだけふさがっていて、そのなかには白のパンティに白のスリップ、肌いろのパンティストッキングに、洗いざらしのブルージーンズ、黒の厚地のスウェーターが入っていたのだ。

「こんな大雪の晩に、野天風呂に入るなんて、ものずきな女だな」

嘲(あざけ)るように、布施恭治(ふせきょうじ)がいった。野天の岩風呂といっても、雪よけの屋根はついている。けれど、四方が吹きぬけだから、湯気は低く渦を巻いて、女の青ずんだ頭にも、肉づきのいい肩にも、横なぐりの雪がうっすら積んでは、たちまち溶けていくのだった。

「死んでることは確かだけど、血は出ていませんね。首を絞められたんでもないようだし、自分

ですべって、後頭部を岩にぶつけでもしたのかな？」
直次郎がささやくと、物部太郎は死体の腕に顎をしゃくって、
「そんなことより、ぼくはあの腕時計が、気になってしょうがない。なぜ、ふたつもしているんだろう？」
女の左手首には、腕時計がふたつ、はめてあった。しかも、ふたつとも男性用で、ひとつは派手な六角形、ひとつは平凡な円がただった。

口絵がわりの抜萃シーン　3

身長は四十センチメートルほどで、切りかむろの髪が、ふさふさとした人形だった。胡粉とぎだし仕上のまんまるな顔に、顎がくくれて、御所人形ふうの小さな目鼻が、かわいらしい。亀甲つなぎの錦の袴に曙染の小袖、牡丹唐草の金襴の袖なし羽織をきて、両手には桐漆の茶卓をさしだしている。
「江戸時代の茶はこび人形を模しているだけで、そんなに古いものじゃありません。明治のおわりか、大正のはじめごろの作でしょう。それでも、からくり人形師としては、最後の名人といわれたひとに、わざわざ関西まで頼みにいって、つくってもらったんだそうです。これにも、祖父の趣味があらわれていまして……」

説明しながら、ぜんまいを巻きおわると、宿の主人は人形の手にした茶卓に、からの茶碗をのせた。両手の位置が、わずかにさがると同時に、ぜんまいの音がかすかに聞えて、人形は動きだした。裾からのぞいた白足袋の爪さきを、雲を踏むように交互に動かしながら、袴に隠れて見えない台についている車で、人形は物部太郎の膝もとへ、ゆっくりとすべってくる。

「近くにきたら、茶碗をおとりください。そうすると、止りますから」

主人にいわれて、太郎が蓋つきの茶碗を両手でとりあげると、たしかに人形は、ぴたっと止った。同時に顔にも、変化が起った。上弦の月のような線が、鼻の上に刻まれているのには、気がついていたけれども、保存をおろそかにしたための疵だろう、と思っていた。だが、ぱっくりとその線がひらいて、小さくえがいたふたつの目が、前髪の下に隠れると、あとには鼻のまうえに、大きな目がひとつ。しかも、媚茶の瞳孔、金色の虹彩、血走った瑩膜、そのぜんぶが、ぎろぎろ左右に動いている。切りかむろの童子が、たちまち、ひとつ目小僧に化けたのだ。太郎はうれしげな声をあげて、

「こりゃあ、いい。熱いお茶が入っていたら、こぼして、火傷をしていたところですよ」

口絵がわりの抜萃シーン　4

「……お願いだ、所長。なんとかしてください。助けてくださいよ。ぼくの手にゃあ、とうてい

負えない」
直次郎は弱音を吐いて、両手をあわせた。太郎は炬燵蒲団を顎までひきあげながら、
「いやだ。絶対にいやだ。東京を立つとき、いったはずだよ。ぼくは炬燵にもぐりこんで、動かないって——こんなことになったのは、きみの責任だ。自分でなんとかしたら、いいだろう」
「ぼくが殺されてもいいんですか、所長」
「いいとも。そんな脅しにのって、腰をあげたんじゃあ、先祖のものぐさ太郎に、申しわけがないや。あいた！」
太郎は蒲団にもぐりこもうとして、炬燵やぐらに、向うずねをぶつけた。直次郎は残念そうに首をふって、
「ぼくを見すてる気なら、覚悟がありますよ。あの女を殺した犯人として、所長をみんなに引渡します。探偵イクオル犯人てのは、推理小説じゃ古い手ですがね。日本ただひとりの心霊探偵、ゴースト・ハンターの物部太郎が、みずから幽霊を製造してたってのは、おもしろいでしょう」
「ぼくを犯人にするなんて、そんなばかなこと、出来るはずがないじゃないか」
「それが、出来るんです。所長が真犯人だという証拠物件を、ぼくは提出できるんですから」
「嘘をつけ」
「嘘だと思ったら、あんたのバッグをあけてご覧なさい」
「めんどうくさいよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「じゃあ、ぼくがとってあげましょう。いいですか、バッグに手はふれませんからね。ちんりんちんりんつんつん、ちりとてちっつん、ちっつんつんつん……」

曲芸や奇術につかう下座のしらべを、口三味線でまねしながら、直次郎は立ちあがって、つくりつけの衣裳箪笥をあけた。右足をあげて、そこにつっこんである太郎のボストンバッグの、持つところへひっかけると、炬燵のそばまで、左足だけでずりよってきて、

「さあ、どうぞ」

太郎は眉をひそめて、バッグの口をひらいた。すると、いっぱいに詰めこんである着がえ類に押しあげられて、河童の頭みたいなものが、盛りあがってきた。

「なんだ、こりゃあ」

太郎が目をまるくすると、直次郎はいとも厳粛に、

「ご存じでしょう？　鬘ですよ。あの女の鬘です。なぜ、被害者はふたつも腕時計をしていたのか？　なぜ、犯人は被害者の鬘だけを持ちさったのか？　あなたがしきりに不思議がってみせていた、その鬘じゃありませんか」

口絵がわりの抜萃シーン　5

「物部先生、お電話です。お部屋のほうへ、おまわししましょうか？」

帳場から、番頭が声をかけた。太郎は立ちあがりながら、短くなったソブラニイのブラック・アンド・ゴールドを灰皿にほうりこんで、
「いや、ここでけっこう。だれから？」
「お名前をおっしゃらないんですが、長距離で、女のかたです」
「だれだろう？」
太郎は首をかしげながら、花瓶にさしたななかまどの枝に、まっ赤な実がかがやいている帳場にもたれて、番頭のさしだす受話器をうけとった。
「もしもし、物部ですが……」
雑音がまじって、女の声はいやにか細く、遠く聞えた。
「もしもし……ご迷惑をかけて、申しわけありません。あたし……水島友子ですけれど——」
とたんに、電話は死んでしまった。大雪のために、電話の架線が切れたのだ。こうして、小さなスキー場の温泉宿は、下界から孤立してしまったのだが、太郎はまだそのことに、気づいてはいなかった。聞えなくなった電話の声にだけ、気をとられていたからだ。
「どうしました、所長？」
直次郎が声をかけた。番頭も同時に、帳場から首をのばして、
「東京からなにか……？」
「もっと長距離だ。あの世からだよ。水島友子だといっていた……」

太郎はまだ受話器を耳にあてたまま、ロビーにいる客たちの顔を見まわして、
「確かにそういったんだ。殺された女が、電話をかけてきたんだよ」

最長不倒距離（あるいは）スキー場殺人事件

謎と論理のエンタテインメント

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.